

災害に屈しない街を創るために

熊本県立宇土高等学校

要旨

熊本県は全国的に見て災害が多い県であり、現在様々な災害対策が進められている。ひとりでも多くの命を救う防災と減災の取り組みを確立するために、宇土市役所危機管理課の方に協力していただき、現在の宇土市の取り組みや課題について調べた。現在は防災井戸や河川監視カメラ、備蓄倉庫の設置など、熊本地震を経て様々な取り組みが進められていた。今後の課題として、ペットとの避難や車中泊のスペース確保、避難者対応に課題があることがわかった。また、マイタイムラインを各家庭で作ることや、行政の「業務継続計画」の策定などの取り組みが必要である。

1 目的

熊本県では、平成28年に熊本地震、令和2年に球磨川豪雨災害が起きるなど、全国的に見て災害が多い県である。

熊本県内では、各自治体で災害対策が進められ、これまでの災害を教訓にした取り組みが進められている。そこで、現在の避難の取り組み、災害に対する考え方に着目して、防災と減災の取り組みを確立するために、宇土市役所危機管理課を訪問して取り組みや課題を調べる。

2 方法

認に

- ①宇土市役所総務部危機管理課を訪問して現在の取り組み、課題を聞く
- ②現地取材をする

3 聞き取り結果

【宇土市が今行っている取り組み】

- ①各家庭に防災ハンドブックの配布
- ②防災井戸、備蓄倉庫の整備
- ③河川監視カメラの設置
- ④避難路の整備
- ⑤防災広場の整備
- ⑥宇土市総合防災マップの更新
- ⑦BCP（業務継続計画）の作成

【課題】

- ①ペットとの避難
トラブルへの対処
- ②車中泊避難スペースの確保
- ③より早く避難所生活から元の生活に戻るための対策
- ④持病を持っている人、高齢者への対応「避難所の見える化」

ecowin宇土アリーナに設置されている防災井戸



4 考察

①ペットとの避難

- ・ペットに特化した避難スペースがない
→犬や猫だけではなく、鳥類や爬虫類のペットにも対応した避難スペースを各自治体に作る必要がある

②車中泊専用避難スペースの確保

- ・熊本地震の際、行政が指定した場所以外で車中泊を

行ったため、保健所や市役所の健康調査や安否確

支障が生じた。

→1つの場所にまとめて車中泊ができる場所を整備し同時にマンホールトイレや防災かまどがあるとより安心した車中泊避難ができると考える。

③避難所生活から元の生活に戻るために

- ・避難所生活が長いと自力で元の生活に戻るのが難しい
→避難所閉鎖後、行政が市民へのアフターフォローができる体制を構築すべきだと考える。また、自治会などの近隣住民との繋がりを大切にしなければならぬと考える。

④持病を持っている人、高齢者への対応

- ・「すべての人に同じレベルの対応をしたい」
「避難所の見える化」

市職員を避難所に配置すると、新たな災害対応や避難者支援業務が滞る為、避難者への対応に支障が生じた→持病を持っている人、高齢者には特に配慮した対応を要する為、避難者のかかりつけ医との連絡体制を強化すべき。

5 感想

実際に市役所を訪問して、避難所や防災の現状を知ることができました。これから私達が避難所や防災の現状を踏まえて一人でも多く助けられるような案を考えていきたいと思います。またマイタイムラインなど、災害が起きる前の対策が大切だと思いました。

お忙しい中、わたしたちのインタビューに応じていただいた宇土市総務部危機管理課の松本貴史さんにお礼申し上げます。ありがとうございました。

6 参考文献

平成28年度 熊本地震における避難所運営等の事例
https://www.bousai.go.jp/updates/h280414jishin/h28ku_mamoto/pdf/h281025sanko05.pdf

災害時に起きた”人”とのトラブルと対策

<https://bcp-manual.com/shelter-trouble/>